



豊かな河北潟に
夢のある干拓地に

NPO法人河北潟湖沼研究所通信

かほくがた



シンポジウム 河北潟における協働の環境保全活動を考える

平成28年12月1日（木）14時より金沢市近江町交流プラザ研修室1を会場に開催したシンポジウムは、40名ほどの方にご参加いただき、会場はほぼ満席でした。

株式会社エオネックスからは同社が長年継続している公園のトイレ清掃について、明和工業株式会社からは自社のバイオマス利用技術による環境保全型の商品のお話がありました。一般社団法人いしかわみらい共創会議からは近隣の小学生や保育園児らと共に河北潟に浮島を浮かべ、水質浄化について考えた取り組みやイベントの紹介、河北潟干拓土地改良区からは干拓地やその農産物の魅力、太陽光発電等についてご紹介いただきました。全額市民出資による風力発電の取り組み等をすすめる合同会社金沢市民発電所／NPO法人市民環境プロジェクトからは地域で取り組む再生可能エネルギーについてお話しいただき、河北潟湖沼研究所からは研究所のこれまでの取り組みと河北潟の再汽水化にむけた新たなビジョンを呈示しました。環境保全活動といっても企業、団体、NPOが様々な方法で取り組んでいます。学びあいながら、連携して活動を展開していければと思います。

CONTENTS

シンポジウム「河北潟における協働の環境保全活動を考える」	1p
河北潟の仲間たち・43「テントウムシ」	2p
2016年度河北潟研究奨励助成	3p
河北潟自然再生まつり2016	4p
エコプロ2016報告	6p
地球環境基金助成活動報告	7p
お知らせ・活動案内	8p

第43回 テントウムシ

カコちゃん ショウくん かほくがたナルドレン



背中の星の数で名前が決まる虫、テントウムシ。フタホシテントウ、ヨツボシテントウ、ナナホシテントウ、トホシテントウ、ジュウサンホシテントウ、シロジュウシホシテントウ、ニジュウヤホシテントウ、名前をみるだけでも面白いですね。親しみやすい形や色で、絵にも描きやすく、背中の星の数をみれば種類が分かり、名前もすぐに覚えられるので子供たちにも人気です。

ところが、最も普通のテントウムシという意味の名前がついているナミテントウは、実は星の数が決まっています。星がないものから19個の星があるものまで多くのバリエーションがあります。また地の色が黒で赤い星を持つものがあるかと思うと、赤地に黒い星があるものもあります。ですから、本当はテントウムシの種類が分かるためには、少し勉強が必要です。ナミテントウのバリエーション、これは遺伝的な多型と呼ばれるものです。基本となる4つの遺伝子タイプによる2つの組み合わせによって、さまざまな斑紋の形が決まってくるのだそうです(参考: <http://nemutou.fc2web.com/namitento/namitento.html>)。

次に、少しテントウムシの生態について書いておきます。テントウムシは種によって食べるものが違ってきます。この点で、畑で作物を作っている人は、2つのタイプのテントウムシがいることを知っています。害虫と益虫です。ナスの葉を食べるニジュウヤホシテントウは害虫ですが、ナナホシテントウは肉食性で、やっかいな野菜の害虫であるアブラムシをよく食べるので、わざわざ捕まえてきてビニールハウスの中に逃がしたりもします。とても小さなコクロヒメテントウやヒメカメノコテントウ

というテントウムシは、小さいので目に付きにくいのですが、草原や畑に棲んでいて、とてもたくさんのアブラムシを食べます。農業にとってはたいへん有用な昆虫です。

品種改良して飛べないテントウムシを作り、農薬の代わりに使用するようなことも行われています。こういう利用の方法を生物農薬といいます。100匹単位でカップに入った幼虫が『天敵製剤』として販売されています。一方、千葉県立成田西陵高校地域生物研究部の生徒たちが開発した方法はとてもユニークで、野外で捕まえたテントウムシの背中をホットボンドで仮止めして飛べなくしたものをビニールハウスに放すというもので、使用後はそのボンドをツメで剥がして野生に戻すというものです。たいへん自然にやさしい方法です。(文: 高橋 久)

2016年度 河北潟研究奨励助成 助成先決定

当研究所が公募した「2016年度河北潟研究奨励助成」について、3件の研究が採択されました。今回は、gooddoのクリック等による原資162,000円に、当研究所役員からの寄付金により増資し、助成総額は30万円としました。また、このうち10万円については、1個人からの研究課題を指定しての寄付であったことから特別寄付枠としました。

2016年度河北潟研究奨励助成採択者

申請者	野田 英樹 さん
申請者所属	いしかわ動物園
助成金額	100,000円
研究課題	河北潟西部承水路と東部承水路に生息する淡水カメ類の長期的研究
申請者	畑山 智史 さん
申請者所属	埼玉大学大学院文化科学研究科
助成金額	100,000円
研究課題	酸素同位体比を用いた過去5000年にわたる海水温度の変化

特別寄付枠

申請者	梶間 周一郎 さん
申請者所属	金沢大学人間社会学域地域創造学類環境共生コース
助成金額	100,000円
研究課題	生態保全及び森林保全型農産物の価格プレミアムの決定要因は何か―「生きもの元気米」認証制度を事例にした一考察

河北潟研究奨励助成の趣旨

河北潟と周辺環境は国営河北潟干拓事業によって大きく変わり、潟面積の減少と淡水化による水質の悪化や汽水性の生物の消滅、湖岸の人工化による自然植生と水辺の野生生物の減少が進んでいます。一方、干拓地はまだ十分には活用されていない状況があります。河北潟と周辺地域の将来を展望し、自然と共存する持続的で豊かな地域を実現する上では、河北潟の自然再生と環境保全、干拓地の有効利用、地域資源の循環的・再生的利用等のあり方を検討する必要があります。

そのため、河北潟湖沼研究所では、河北潟に関する基礎的学術資料の蓄積を図り地域の持続的な社会のあり方を検討すると共に、地域の研究ネットワークを広げる取り組みの一つとして、専門的知識を持った研究者や学生の方々、持続的社会的実現を目指し活動을続けてこられた方々が取り組む研究を奨励し助成をおこなっています。これまで、7名・9件の助成をおこない、その成果は7編の論文として報告されています。

河北潟研究奨励助成の特徴として、実績のある研究者だけでなく、若手や地域の中で地道に研究を進めてきた人を積極的に支援していることが挙げられます。必要に応じて研究への助言や現地活動での支援を行っています。また、実施後には論文作成を推奨し、必要な支援も行っています。

もう一つの特徴として、助成の原資があります。河北潟湖沼研究所は、会員からの会費や支援者からの寄付、民間等からの助成金、受託事業の実施、自主事業の展開により活動資金を調達していますが、決して十分な財源を持っているわけではありません。そこで、河北潟研究奨励助成を行うにあたっては、ソーシャルグッドプラットフォーム「gooddo」による、全国のみなさまからのクリックによる支援金を原資とすることとし、みなさまに支援を呼びかけることで原資を調達しています。多くの方の少しずつの応援で、助成対象者の研究活動を支えていくという考え方で運営しています。

「そこにある自然で楽しむ」 河北潟自然再生まつり2016

河北潟自然再生まつり2016が10月16日（日）に開催されました。今年で第7回目を迎え、こなん水辺公園の秋の恒例イベントとなりました。今年は運営部隊として実行委員会が設置され、当研究所スタッフメンバーに金沢大学の学生さん2名が参加して、話し合いを重ねることができました。チラシにタイムスケジュールを盛り込んだり、Webで情報をこまめに発信したり、まつりの雰囲気が伝わるポスターをつくったり、その甲斐あって当日600名を超える方々にご来場いただきました。テーマ「そこにある、自然で楽しむ」のもと、河北潟とつながる様々な活動団体により楽しいプログラムが展開されました。（文：川原奈苗）



ヨシ舟にのろう！ in大宮川

河北潟のヨシで舟をつくった「ヨシ舟」を浮かべ、たくさんの方に楽しんでいただくことができました。



河北潟カヌー体験 in河北潟

公園で受付後、河北潟の湖岸に出てカヌーにのります。広い湖面まで出られたそうで、体験された方は河北潟の自然を満喫されたようです。



セイタカアワダチソウの花で手染め体験

外来植物のセイタカアワダチソウの花を摘み取って染料にした手染め体験。美しい黄色のオリジナルハンカチができ、みなさん笑顔でした。



テントを持参してもO.K.

芝生広場でのんびり過ごすことができます。
お昼はめった汁に行列ができました。



ちょっとだけ釣り、外来魚駆除釣り大会

河北潟自然再生まつりは、公園の外でもプログラムがおこなわれています。血の川は釣り体験を楽しむ方でいっぱいになりました。



河北潟生産物売り場

会場の入り口に売り場が並び、新鮮な河北潟地域の野菜やお米、こだわりパンが販売されました。



紙をつかってあそぼう

金沢星稜大学の学生さんたちによってつくられたプログラム。大人も子供も体を動かして遊んで、楽しそうな笑い声がきこえてきました。



紙ひこうきを作って飛ばそう

地元・大崎の方が企画して実施されたプログラムです。子どもたちに大人気で、大人の手が足りない様子でした。



セイタカアワダチソウ抜き取り大会

会場全員参加のプログラムです。恒例行事となりました。楽しく遊んで、外来植物の抜き取りがおこなわれます。このあと水辺公園ウルトラクイズもおこなわれました。



かみしばい、トキメキ体験教室

管理学習棟内では、津幡高校の生徒さんによるトキメキ体験教室や、かなざわ紙芝居倶楽部のかみしばいがおこなわれました。

環境とエネルギーの未来展

エコプロ2016

2016.12.8. (木) ~12.10. (土)

会場／東京ビックサイト

主催／(一社)産業環境管理協会、日本経済新聞社

日本最大級の環境展示会であるエコプロ2016に今年も参加しました。これで4年連続の出展となりました。東京有明の東京ビックサイトで12月8日から3日間、河北潟湖沼研究所が力を入れている自主事業である、「生きもの元気米」の取り組みの紹介と販売をメインにした展示でした。常勤スタッフ2名の他、理事3名が（尾上、高橋、高野）が手伝いました。多くの来場者があり、生きもの元気米については155袋を販売することができました。すでに生きもの元気米について知っている人も何人かいらしゃって、首都圏でも少しずつ知名度が上がってきていることが感じられました。また、取り組みについて関心を持つ方も多く、熱心にメモを取りながら、こちらの話を聞いてくる人もいました。また、行政の関係者や飲食関係の会社の方からの質問もありました。ネオニコチノイド系農薬と畦の除草剤を使わないこととともに、田んぼの生物調査と田んぼ毎の袋詰めにより、安心・安全を担保する生きもの元気米の特徴に興味を持つ方が多くいらっしゃいました。

「生きもの元気米玄米がゆ」や「生きもの元気レンコン」、「七豊米」のほか、「外来種パズル」に興味を持つ方もいました。また、田んぼ生態系ツリーは今年で2回目ですが、飾り付けしていただく生きものを増やしたことから、昨年よりも興味を持つ方が多くいらっしゃいました。

さまざまな環境団体の方もブースに訪れていただき、また近くで棚田の取り組みの展示コーナーがあったことから、農家の方との交流もできました。毎回、収穫の多いエコプロですが、石川県から参加するためにはそれなりの旅費が必要となります。これまでアクト・ピヨンド・トラストと地球環境基金の応援をいただき、4回の出展を続けることができました。2017年度については、今のところ出展するかどうかは未定ですが、これまでの出展による効果を検証しつつ、資金の確保と出展内容の検討を進めていきたいと思っています。また、石川県の他の団体との共同出展も検討していきたいと思っています。（文：高橋 久）



地球環境基金助成活動報告

河北潟湖沼研究所は地球環境基金より平成26年度から3年間、河北潟の水辺と農地の環境保全の活動を助成をしていただいています。今年度はその最終年にあたり、12月10日にはエコプロ2016が行われていた東京ビッグサイト近くのTFTビルで活動報告会があり、助成活動についての報告を行いました。河北潟地域で協働による環境保全活動を広め継続していくため、自主的・継続的に参加する人を増やす、活動から活動を継続するための原資を生み出す仕組みを作ることを活動の基軸に、現場での実践活動と、活動による環境改善効果の調査を行いました。

現場での実践として、水田環境保全のための生きもの元気米や七豊米の活動、外来植物の除去活動と外来植物を利用した堆肥作り、都市住民とつながりを作るゆうぐれ金曜マルシェ等をすすめました。調査では、Jクレジット制度へのプロジェクト登録を目指した外来植物を除去して堆肥化した場合と、除去しないで自然に分解される場合やゴミとして処分される場合を比べた温室効果ガス排出量の削減量調査、活動による環境改善効果の調査を行いました。

外来植物除去活動とその堆肥化により削減される温室効果ガスの削減量で、Jクレジット制度への登録申請を目指していましたが、今後、制度が求めるJクレジットのプロジェクトは大規模な事業であるということから、現在の活動規模では難しく、行政や企業との協力が必要であり、こちらは

今後、少し時間のかかる事項となっています。

一方、現場での実践活動では、助成前に年間100名程度の参加者であったものが、助成期間には年間約350名が参加するようになり、大きく活動が進展しました。親子連れでの参加や都市部からの参加も増え、河北潟の水辺や農地をたくさんの方に身近に感じてもらえるようになったと思います。活動を通じて教育機関や企業とのつながりもできました。新たに活動に参加、連携する方々がたくさんできたことはこの期間の大きな成果です。この方々と今後も連携し、活動に継続的に参加していただけるよう運営や広報等の仕組みをさらに整えていきたいと思います。

番外編 WOMAN EXPO TOKYO Winter2016

12月3日（土）、東京ミッドタウンで行われたWOMAN EXPO TOKYO Winter2016に行ってきました。このイベントに出展されていた地球環境基金ブースで、基金より助成を受けている団体として、活動紹介する機会をいただいたためです。「食することで環境保全 食べる人、作る人、田んぼの生きもの みんな元気に」と題して、ブースを訪れた方に河北潟でおこなっている農地の環境保全活動、生きもの元気米を中心に活動を紹介しました。田んぼでの問題や、環境に配慮して作られたお米を食べることが農地を守る環境保全活動につながることをお話し、その他河北潟でのヨシ舟作りや外来植物除去活動等も紹介、たくさんの方に活動についてお話しすることができました。イベントの名前通り、来場されている方はほとんどが女性で、ふだんの活動現場ではあまり接点のないような方が多かったのですが、多くの方が真剣に耳を傾けてくださいました。これまで研究所が活動PRのために参加している環境系のイベントとは少し毛色の違うものでしたが、活動を広めていくためには、こういった違った場に出ていくことも必要であると感じました。（文：番匠尚子）



ロハスフェスタin万博公園

第26回ロハスフェスタin万博公園・10月29日
30日の2日間に出演し、生きもの元気米の活動
PRと販売をおこないました。大阪万博記念公園
に出演するのは初めてのことで、東京ロハス
フェスタとは違った雰囲気がありました。来場
者の印象として、環境保全や食に関心を持つ方
は限られていました。テントを持参してのんび
り過ごす家族連れがたくさんみられました。



チクゴスズメノヒエ除去活動

11月19日、24日、26日に水辺の外来植物除去
活動がおこなわれ、4トントラック約4杯分の
チクゴスズメノヒエが水辺から取り除かれまし
た。26日の大場地区では、天候に恵まれ、2つ
の企業からの参加もあって、大勢で活発におこ
なわれました。「想像以上に過酷だったが、
清々しい気持ち、また参加したい。」といった
感想をいただいて、地元生産者のみなさんも大
変嬉しそうでした。株式会社伊藤園さん（金沢
支店）、株式会社柿本商会さん、ありがとうござ
いました。企業、地域、NPOが連携する有意
義な取り組みとなりました。



琵琶湖地域の水田生物研究会

12月18日(日)に琵琶湖博物館ホールにて「第
7回琵琶湖地域の水田生物研究会」がおこなわ
れ、琵琶湖地域を中心に全国各地の田んぼの生
きものに関する研究活動が発表されました。当
研究所も生きもの元気米の活動について報告し
ました。ミニシンポジウムでは、田んぼとその
周辺に5,668種もの生きものがあることが報告
され、田んぼの重要性が再確認されました。



七豊米・来年に向けて

大勢の力で作る「七豊米」の米づくり、5
年目も無事に終了しました。来年に向けて12月
22日と28日に、堆肥を田んぼにまきました。年
明け1月7日にはトラクターで耕耘しました。



金沢駅西ゆうぐれ金曜マルシェ

金沢駅西広場で開催しているマルシェは、12
月23日で2016年の開催を終了しました。ご来場
くださった皆様、ありがとうございました。



編集後記

春から毎週金曜日の開催となったマルシェ、継
続できるか不安なところもありましたが、ぶじに
2016年を終えることができました。ご来場いた
だいた皆様、運営にかかわる皆様に感謝です。(N.)